

心身障害児の親子関係に関する研究

長畑 正道 (筑波大学心身障害学系)

南風原幸子 (筑波大学心身障害学系)

本年度は心身障害児の親子関係について、とくに自閉症と神経性食欲不振症について研究を行った。

1 自閉症の親子関係——とくに対人的認識の障害について——

自閉症の親子関係をとり上げるに当っては、自閉症の対人的認識の障害をよく理解する必要がある。その際、とくに知能のおくれのない症例を選んで検討することが大切で、そのような症例ではじめて本来の自閉症的な対人認識の障害の状態が浮彫りにされてくる。

自閉症の対人的認識の特徴は Rutter¹⁾ が述べているように mind-reading が出来ないという点にある。こういったことより独特な対人関係をもつようになる。しかし、長年一緒に暮している親は、こういった欠点をよく見抜き、むしろ積極的にそれを補うような態度を示す。自閉症児は決して対人関係が持てないのではなく、こういった特徴を周囲の人がよく理解して接すれば、むしろ人柄の純粋さが浮び上り、本人の無防備さが目についてくるようになる。親はむしろこういった点がよく理解できるため、つい子どもに手を貸してやり、気づばりをしてしまうことになる。しかし子どもはこういった配慮は当然のこととして受け取っている。そのため事情がよく判らない他人との関係では、こういった配慮が働かず、しかも本人自身も他人の気持の動きを把握することが一番の苦手であるため、さまざまな誤解がお互に生じ、対人関係に破綻を来してしまうことになる。この意味からいえば、親は子どもに対し、年齢が長じてもいつまでも幼い子どもに対するような態度で接しつづけるをえないことになる訳である。この意味では自閉症児の親子関係はむこう安定したものではありませんといった印象さえ受けるのもうなづける。以上のような特徴を幼児期より20年にわたる follow-up の結果より結論づけることができ、また知能のよい自閉症児の症例については最近の症例でもたしかめ

られた。

また自閉症児の言語障害は語義理解・言語使用困難症候群²⁾ときわめて類似しているが、両者は全く同一であるとはいえない。自閉症の場合、やはり独特の思考の障害があり、それは mind-reading の困難さとも関連している。この点についても両方の症例の神経心理学的検査の結果を症例によって比較検討した。

2 神経性食欲不振症と父親

神経性食欲不振症の心理的背景として、父親らしさ Väterlichkeit の欠如³⁾が指摘されている。最近経験した12歳女児の症例についてこの点を追求した。

10歳の頃まで両親と本児の3人家族で暮していたが、父方の祖母が乳癌になり、父方の祖父母の家に同居するようになった。しかし父は単身赴任のまま勤務を続け、週末にのみ自宅に帰る生活となった。11歳の時、担任の教師が体育に熱心で、課外に特別に体育を指導していたが、本児は受験のため、この課外の体育には参加しなかった。こういったことで担任の教師からつらく当られることが多くなった。この新しい担任に代ってから3カ月くらいして、次第に食欲を失い、体重が36kgより26kgに減少してしまった。その頃祖母の病気の方も手術がうまく行き回復してきたので、新学期より父の勤務先の学校に移ることになり、再び親子3人の生活に戻るようになった。しかし、その後も依然として食欲はなく、体重も26kgからふえず、状態は変らなかった。そこで入院し検査を受けたが、身体的にはやせている以外問題はなく、神経性食欲不振症と診断された。入院中に強い退院要求があり、体重は回復しないまま退院し、外来でわれわれによる面接治療を続けることとした。

本児の食欲不振は小学校の担任による学校での不適切な本児への接し方が原因のように見えたが、そのような状況が変わっても一向によくならなかった。外来で

の面接治療の中で、本児は祖父母を非常に嫌っていたことが明らかとなった。しかし、母はよい嫁として祖父母によくつくしていた。また父親は真面目な研究者で、研究に没頭し、母親は父親のこういった生活態度にもよく理解を示し、よい妻のイメージを保っていた。そして父親は母親の気持を十分汲みとろうとはせず、こういったことに本児は母親に代って心理的負担を一人で背負っている状況にあることが次第に明らかとなって来た。父親は本児に対しまだ子ども扱いしかできず、本児のこういった配慮には全く気がつかず、心理的な父親不在といった状況が強く浮び上って来た。ただ母親はこういった事情が次第に明らかになって来ても、現時点では父親に態度を変えてもらうような働きかけが出来ず、どうしてよいか思いあぐんでいる現状である。本児にみられた神経性食欲不振症の家族力動の中で

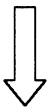
は、父親の役割りが最も重要なポイントであるといっ
てよいと思われる。

文 献

- 1) Rutter, M. : Cognition deficits in the pathogenesis of autism. *J. Child Psychol. Psychiat.*, 24:513-531, 1983.
- 2) Rapin, I. : Disorders of oral and written language. In Rapin, I. : *Children with brain dysfunction—Neurology, cognition, language and behavior*, pp,131-156, Raven Press, New York, 1982.
- 3) 石川 清, 阿部完市 : 神経性不食症患者の長期予後と治療機転について. *精神医学*, 9 : 513-517-1967.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



本年度は心身障害児の親子関係について,とくに自閉症と神経性食欲不振症について研究を行った。